

佛法の傳播及び本地垂跡説 : 論説

著者	武藤, 虎太
雑誌名	龍南會雜誌
巻	42
ページ	6-15
発行年	1895-12-26
その他の言語のタイトル	仏法の傳播及び本地垂跡説 : 論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/4750

佛法の傳播及び本地垂跡説

教授 武藤 虎 太

序 論

今を距る三千餘年紀元前五七世紀の交に於る東西の歴史を繙き來らんか絶大の宗教家、雄偉の哲學者勃然として洋の東西に崛起し各一家の言を爲して幽妙の眞理を探究し現世の衆生を濟度し遂に宇内今日文化の淵源を爲し來れるを見る支那に在ては孔老二家出て、前人未發の理趣を究め千載の師表を爲り次て申韓刑名の學、楊墨列莊各種の學一時に起り希臘に在ては殆ど之と同時代にタリテレス、アナキシマンダス、アナキシタテス、ピタゴラス、エムペドクレス、ヘライクタイトス、ヘルメチス等出て、各宇宙の本源萬有の妙理を究め次てアリストテレス出て、一代の教學を風靡し萬世の師表と稱せらるゝに至り、而してペルシヤに在ては拜火教の鼻祖たる^{ザラトラストラ}匝拉杜斯多刺も亦實に六世紀の頃に生れ、ミマンサ派ウエダンタ、サンクヤ、ニヤヤ、衛生師派等は七世紀より五世紀の間印度に於て起り各自獨創の哲學を述べたり然れども善く之を統一し之を糅合して幽妙深遠の哲學、絶大無比の宗教を創め一世の智勇を推倒し萬古の心胸を開拓したるに至ては實に錫蘭の孤嶋に崛起し刹利より出て大聲疾呼天上天下唯我獨尊と呼號し世界を勸化し衆生を濟度したる釋迦牟尼佛其人にして其智勇辨力東西三萬里上下五千載、誰か能く之と匹敵す可きもの有らん、抑も釋尊の出生入滅に關しては古來諸説紛々として一定せず其入滅に關しても已に五十三種の説あり其最古と最新と兩極端の説を比すれば實に二千五十四年の甚に及ぶ而して其現今普通に認めらるるもの、本邦紀元前後即ち西洋紀元六七世紀前に在りとす(村上講師釋尊入滅年代考には本邦紀元前三百八十九年とあり未知孰是且つ此に掲ぐ)是より其後佛教は積水を潰して之を決するが如く氾濫洋溢、底止する所を知らず殆ど世界を打て佛教國の

二九と爲さんとするの概あり荒漠たる蒙古地方に入てはシャマニズムとして知られ延て西藏に及び南は爪哇、蘇門答羅及び南洋諸嶋に進て Bojo Brude の紀念碑は今尙嶄然として當年の事を追想す紀元後八九世の頃シヤンカラ阿闍梨一たび出て、婆羅門の勢力を恢復し佛教は殆ど其跡を中部印度に絶つに至りしも尙南方錫蘭は勿論北方にてはネ、パール、カシミール、シツキム、ダールゼヱツング等に存し東南は緬甸、暹羅、安南及び南洋諸嶋に蔓延し東北西藏、支那、蒙古、朝鮮、日本の如きは今尙佛教國たるの看あり而して紀元前三百二十七年希臘のマセドン王歴山、印度遠征を企て遂に信度河を度り Punjab の Hydaspes 河畔に於て Porus 王を征服し餘勢の激する所印度全州を席卷せんとせたるも軍を万里に懸けて將士の歸心矢の如く業半にして退軍せしも十二萬の大軍親しく印度の土地を實歴し風を觀俗を察し其聞見する所遂に全國に傳播し殊に歷山部下の大將 Seleucus Nicator はシリヤ王となり其史官 Megasthenes 氏が印度王旃達羅超多の所に至り釋尊誕生の地遂に各地を跋渉して印度志四卷を著すに至れりされば兵力に於て希臘が全勝を占めたるも智力に於ては其印度に負ふ所實に尠きに非ず況んや釋迦に後るゝ數百年雄偉の宗教を創めて世界を聳動したる耶蘇教も大に佛教の感化を受たる所あり遂に耶蘇教が全く佛教より出たりとの説近來シヨツペンハウエル、ルナン、アーカイ、リ、ト等西洋學者の間に行はるゝに至れり然らば則佛教は實に世界の一大勢力にして古今を通じ萬國に涉り更に匹敵すべきもの無しと云も實に過言に非るなり吾人が今西洋及び南北地方佛教の傳播を措て直に支那より延て日本に傳はりたる形跡を一觀せん

以上主として井上博士講義を參照せり

第一章 佛教の傳播

第一節 支那佛法の傳來

佛教の支那に入るや事頗る古し秦始皇の時沙門室利防等十八人西域より佛教を齋らし來りたるも始皇は其異俗なるを惡み之を囚禁（歴代三寶記、佛祖統記、佛祖通載）云へば當時未だ行はるゝに至らざりしも前漢の武帝に至り南征北伐頗る四夷を牽制せし結果は偶然にも佛道流通の端を啓くに至れり魏書に

漢武元狩中、遣霍去病討匈奴、至臯蘭、過居延、斬首大獲昆邪王殺休屠王、將其衆五萬來降、獲其金人、帝以爲大神、列於甘泉宮、金人率長丈餘、不祭祀、但燒香禮拜而已、此則佛道流通之漸也、

又あり其後哀帝の時始て浮屠經を受る者あり魏書に及開西域、遣張騫使大夏還傳、其傍有身毒國、一名天竺、始聞有浮屠之教、哀帝元壽元年、博士弟子秦景憲、受大月氏王使伊存口授浮屠經、中土聞之、未之信了也、

とあり西域地理の漸く明なると共に佛教も漸く中國に顯はれたるも未だ信仰を得るに至らざりしか後漢明帝に至り靈夢は遂に佛教傳播の基と爲れり後漢書に

世傳明常夢見金人、長大頂有光明、以問群臣、或曰西方有神名曰佛、其形長丈六尺、而黃金色、帝於是遣使天竺問佛道法、遂於中國、圖畫像焉、楚王英始信其術、中國因此頗有奉其道者、

と魏書の言ふ所亦此の如し歴代三寶記は更に明帝求佛の事を述べて曰く永平七年明帝靈夢に感応西域に佛經を求められたるに同十年に至り摩騰、法蘭、蔡愔等と共に佛經を白馬に馱して洛陽に入れりとは是時に當り道教の盛に支那に行はれ周公孔子の教は名教の範疇と爲りて儒者の間に行はれたるも道士は尙各所に散在し陰陽五行の説に由て怪誕奇説を恣にしたれば端なくも佛教と一大撞着を生じ褚善信、費叔方等類に上表して之を阻格せしも其鋒當る能はず今や佛教は殆ど已に支那全州に蔓延せんとするの概あり

是より先紀元三百九十九年東晋安帝の時法顯フツモン同學の慧景、道整、慧應、慧塊等と共に印度に向て出發し幾多の辛酸を経て遂に印度に入り梵語を學び經文を集め紀元四百年(義熙六年)海路を経て支那に歸着し西域の沙門と經文を翻譯し又歷遊天竺記傳即ち佛國記(又法顯傳とも云)一卷を著せり法顯の西域に入るやカプールの南岸及ペンジャウル等佛教最も盛大を極めたりと云ふ後一百八年北魏の僧惠生、宋雲と共に胡太后の命を奉じ天監十七年西域に赴き經文百七十餘部を得て梁の普通二年(紀元五百廿一年)に歸朝し使西域記一卷を著せり此他に智元智猛法勇寶雪等の印度に趣くあり是に於て支那に於る佛教は愈盛大となり經文の翻譯益行はる斯て唐の太宗貞觀年中玄奘三藏出て其三年秋八月(紀元六百廿九年)を以て印度に向ひ古を訪ひ學を講じ自ら實踐する者百一十國傳聞する者廿八國貞觀十九年國都長安に歸る其間實に十七年の久に及び六百五十七部の梵經を巨象に載せて歸り譯出するもの七十五部千三百三十五卷の多に及ぶ著はす所の大唐西域記十二卷は後人を利すること尠からず降て成享二年(即ち紀元六百七十一年)義淨も亦印度に遊び梵文の經律論を齎らせまこと殆ど四百部にして其中五十六部二百三十卷を譯せりと云ふ其著南海寄傳四卷は見聞の筆記にして考古學上の裨益實に尠らず其他大唐西域求法高僧傳二卷と著はし嘗て西域に歴遊せし沙門五十六人の傳を述べたり斯の如く支那歷代の間親く西域に入て經文を求むる者益多きと同時に佛法は愈々支那内地に行はれ慈恩大師出で、法相宗興り法藏法師出で、華嚴宗大に興り金剛智三藏來りて眞言宗茲に始まり智者大師出で、天台宗興り天下靡然佛教に向ふ而して是より先き佛教は業已に朝鮮半島に行はれて我日本に傳はるに至れり

第二節

本邦佛法の傳來

紀元五百廿三年繼体天皇十六年司馬達等南梁より來朝之、大和高市郡坂田原に廬を構へ日夕佛像を拜したるも當時我邦人は單に蠻神と稱し更に佛教の何物たるを解するもの無り之が蘇我馬子出るに及び司馬達等と論議し茲に佛教傳播の種子を播きたり

司馬達等南梁人、繼体十六年來朝、于時此方未有佛法、達等於和州高市坂田原、結草堂奉佛、世未知

佛、號曰異域神、屬馬子鄉佛乘、達等翼贊之

元享釋書

墟囊抄も亦之に全じ後八十九年欽明天皇十三年百濟の聖明王使者を遣は之釋迦佛の金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷を獻じ別に上表きて其功德を稱讚して曰（書記）

是法於諸法中、最爲殊勝、難解難入、周公孔子、尙不能知、此法能生無量無邊福徳果報、乃至成辨無上菩提、譬如人懷隨意寶、逐所須用、盡依情、此妙法寶亦復然、祈願依情、無所乏且夫遠自天竺爰泊三韓、依教奉持、無不尊敬、由是百濟王聖明、謹遣陪臣怒喇斯致契奉傳帝國、流通畿内果佛所說、我法東

流、

と是に於て帝普く群臣に下して議せ之め玉ふ物部尾與、中臣鎌子ハ我邦由來天神地祇を祭り禮邦務を爲す今遽に蕃神を拜せば神明の怒に遭はん」と云ひしも蘇我稻目は從來別に見る所有りしと見へ諸蕃皆拜すれば皇朝何ぞ獨り拜せざる可けん」と遂に勅許を得て小墾田チハリタの家に安じ次て向原寺を建つ是に於て佛教遂に縉紳の間に入る既に之て疫癘大に行はれ人民天殘す是に於て物部中臣の奏に由り一旦佛像を灘波の堀江に投じ火を放て伽藍を燒さ之も明年五月奇樟を芽渟海に得て佛像二軀を刻ましめ玉ふ十五年百濟國より沙門曇慧、道深來朝し漸く佛教普及の端を啓く

日本書記
元享釋書

敏達天皇の時に當り百濟王、我使者大別王に經論若干、律師、禪師、比丘尼、佛工、寺工等を附し貢す爾

來沙門佛像の進貢常に絶へず而て蘇我家は世々佛教に歸依し信仰殊に厚き馬子の時に當り疫病大に起り佛教殆ど跡を本邦に絶たんとす是時に當り佛教界の偉人皇族の中に出て「諸佛之道、諸神不敢違^傳、太子との説を立て、佛教の命脈を將に絶んとするに維持し用明帝病に罹り玉ひてより端無くも佛教興隆の基を啓けり

厩戸皇子は敏達帝の皇子なり幼にして穎悟夙に佛教を信じ蘇我馬子と共に頻に佛法興隆の策を講じ或は天下に放生を令じ或は佛像を崇む帝の不豫なるや群臣を會し三寶に歸せんことを議せしめ玉ふ中臣勝海、物部守屋は之に反せしも馬子は詔旨を奉すべしとて豊國法師を延て禁中に入れ茲に隙を生じ馬子遂に舍人迹見首赤檮をして陰に勝海を殺さしむ^{太子伝}而して司馬達等の子多須奈は帝の爲に出家して道を修め寺及び丈六の佛像を造る既にして帝崩じて崇峻帝立ち太子遂に馬子と謀り守屋を攻滅し祈禱靈有るを以て太子は四天王寺を攝津に立て守屋の田宅奴婢を分ち卑へ馬子も亦法興寺を飛鳥に建てたり是に於てか佛法の反對黨は盡く跡を絶し佛教黨益盛大を極め馬子の專横なる遂に帝を弑するに至れり^{太子伝}_{元享釋書}

推古帝の即位に及び厩戸太子と爲り馬子と共に益々三寶を興隆去上の好む所下殆ど焉より甚きものあり諸臣競ぶて佛舎を作り堂塔を構へ佛像を刻み法興寺峰岡寺等大に興り^{朝野群載}十年百濟の僧觀勒來朝し曆本及び天文地理書等を貢す即ち書生をして就て學ばしむ十二年十七憲法の成るに及び篤信三寶の語あり蓋は是に由て以て下民を風化せんと欲するなり是に於て帝の十五年小野妹子を隋國に遣ざるゝや太子ハ託して佛經を求め又沙門數十人を去て法を受けしむ^{太子傳}是に於てか從來三韓を経て傳來せし佛教も今は直に支那に向て求むるに至り帝の晩年沙門惠濟光遂に唐より來る^{釋書}

而きて寺院は益盛大となり廿二年太子親ら臣連伴造國造以下建る所の諸寺を巡檢之其田園無きものは特に之を給與し大に獎勵保護を加へて其死に臨みて尙諄々佛法を紹興之伽藍を營建すべしと遺言し玉へり法王帝說太子傳されば太子薨去の後數年ならざるに天下の佛寺四十六僧侶八百十六人尼五百六十九人に及べり之を要するに本邦の佛法殆ど太子の力に由て今日有るを致せりと謂べし又舒明帝の四年唐の使人高表仁來朝し留學生靈雲僧長亦歸朝す是より佛教の學說益明に遂に宮中に藏經無量壽經文を講ずるに至れり孝德帝即位し大に萬機を攝し革新の政を行ひ玉ひしも尙深く佛教を信じ元年大寺の僧に詔を下し玉へる中に曰く書紀

朕更復思崇正教、光啓大猷、故以沙門狛大法師、福亮、惠雲、常安、靈雲、惠至、僧長、道登、惠隣、而爲十師、別以惠妙法師爲百濟寺々主、此十師寺宜能教導衆僧、修行釋教、要使如法、凡自天皇至伴造所造之寺、不能營者、朕皆助作云々

と是に於て佛寺佛像益其數を益し讀經に會するの僧尼常に幾千人に及ぶ齊明帝の四年智通智達兩僧を遣はし唐僧玄奘に就て無性衆生の義を受けしめ天武帝に及び又深く佛法を重んじ元年書生を聚めて始めて大藏經を寫さしめ四年使を四方に遣はし金光明及び仁王經を説き又親王諸臣に勅し僧尼を度することを許す七年始めて諸寺の名及び僧尼の法服及び僕馬往來の制を定め朱鳥元年槍隈寺、輕寺、大窪寺に三十年を限り各百戸を封じ巨勢寺に二百戸を封せらる持統帝の四年に及び安居の比丘施與を受るもの三千三百六十三人の多きに及び而して皇太子は又別に三寺の安居僧三百二十九人に施與し玉ふ是時に當り天下の寺院五百四十五の多きに及ぶ扶桑略記又盛なりと謂べし

文武帝の大寶元年僧尼令既に成る凡そ廿七條僧尼度捨の事より百般の制度盡く之に由て規定し今や

佛教は殆ど天下の國教の如く使臣を遣はして之を大安寺に講せしめ玉ふ而して僧尼の權力漸く大となす諸寺多く田野を占有し兼併風を爲し其數限無きに至り元明帝の和銅六年詔して自今以後格は過るものは宜く悉く還收すべしと令し玉ふに至る元正帝靈龜二年詔を發して曰く續紀崇饒法藏、肅敬爲本、營修佛廟、清淨爲先、今聞諸國寺家、多不如法、或草堂始開、爭求額題、幢幡僅施、卽訴田畝、或房舍不修、馬牛群集、門屋荒廢、荆棘彌生、遂使無上尊像、永蒙塵埃甚深、法藏不免風雨、多歷年代、絕無構成、於事對量極乖崇敬、今欲併兼數寺合成一區、庶幾同力共造更與頽法續紀佛實に罪無しと雖も僧尼檀徒の奸濫益甚しく堂塔成ると雖も僧尼住せず擅越子孫、田畝を總攝して衆僧に供せず佛教の大勢漸く流弊を極むるの看むが尋て養老元年詔て曰く續紀頃者百姓乖違法律、委任其情、剪髮髡髮、輒着道服、貌似桑門、情挾奸盜、詐僞所以生、姦宄自斯起也、凡僧尼寂居寺家受教傳道、准令云、其有乞食者、三綱連署、午前捧鉢告乞、不得因此更乞餘物、方今小僧行基并弟子等、零疊街衢、妄說罪福、令構朋黨、焚剝指臂、歷門假說、強乞餘物、詐稱聖道、妖惑百姓、道俗擾亂、四民棄業、進透釋教、退犯法令也、僧尼依佛道、持神祝以救病徒、施湯藥而療痼病、於今聽之、方今僧尼輒向病人、令家詐禱、幻怪之情、辰執巫術、遂占吉凶、恐脅耆穉、稍致有求、道俗無別、遂生姦亂三也、如有重病應救、請淨行者、經告僧綱、三綱連署、期日令赴、不得因茲逗留延日、實由主司不加嚴、致有此弊自今以後不得更然、布告村里、勤加禁止、續紀と蓋し大寶の際法令新に出て綱紀畢く張り僧徒の法を踰へ紀を干すもの少かりしが因習漸く久むくして積弊遂に之に乗じ後に左京の僧尼等巧に禍福を唱へて戒律を練ら求内聖教を躡し外皇猷を勵ぎ或は室家を離れ或は街衢に乞ひ姦亂至らざる無く其衆庶を害する尠からず六年遂に太政官の奏を

以て嚴に禁斷を加ふるに至れり。然るに、（以下略）顧ふに佛教の我邦に入る漸を以て行はれ終に二三縮紳の間に萌蘖を養ひ來りしも聖太子一たび出で、（以下略）佛法の教鬱然として勃興し根深く蒂固くして枝葉益繁へ。佛寺の設け天下に蔓延し僧尼の數年々多きを加へ佛法傳來より聖武天皇に至る迄十六代百七十餘年其間天智帝は蘇我氏を滅し國造縣主の權を收めて郡縣と爲し玉ひ天武帝は弘文帝の天下を奪ふて強臣を一掃して親王政治を起し玉ひしが如き政治上の變動頗る之れ有りしも佛法は依然勢力を有し鎌足の蘇我氏を滅せたるが如きは世を神職に供せし家なれば或は佛法を敵視する無さかの感有るも然れども鎌足は佛に抗せざりしのみならず百濟の尼法明維摩經を誦して自己の疾癒へたるより益々之を尊信し其死するに臨みては剃髮するに至れり天智帝も亦熱心なる信者たりしこと夥多の佛寺を建て佛像を刻みしに徴して知るべし、されば嗣て王たるもの皆盛に佛教を興し玉へり然れども日中すれば必ず傾き月盈れば必虧るは事物自然の理數にして盛者必衰の理に遂に本邦佛教の上に見られ僧尼の奸濫、寺社の兼併益甚しく功德衆生を濟度する能はずして惡風却て良民を害するに至り顛異なる行基菩薩をして小僧行基と稱せしむるに至る、加之神道は本邦立國の大本にして日本人の祖先は神代諸神より出たりとし八百萬神を祭るは即ち是れ天下の政事、祭政全く一致して天災時變内患外憂等興るに逢へば事則ち必ず伊勢神宮賀茂住吉等諸社に奉幣して災を攘ひ福を禱るは本邦古來の慣制なれば縱令ひ一面には佛教益盛大を極むるも他の一面にハ伊勢太神宮及び八百萬の天神地祇は依然勢力を有して一方に雄視し物部中臣二氏の失敗は毫も神威を損せざるなり事情既に此の如し苟も雄才大略の士其間に出る無んば佛教の中興は殆ど期す可らざるに至らん

是時に當り崇佛に熱心なる帝皇は出で玉へり佛道に達せる大智識ハ出でたり神佛調和説ハ創められ
たり調和説とは何ぞ本地垂跡の論なり此論一たび出で、傳教弘法兩大師之れを後に傳へ兩部神道説
となり神は佛の權現説となり鎌倉室町兩幕府を經戰國亂離の世を通じ徳川の世を終る迄千有余年神
佛混合説は依然國郡に行はれて所謂社僧と稱するもの概えて神事に供せり請ふ試みに其説の由來を
釋ん(未完)

雜 錄

印度の宗教 (中)

巴 城 生

前篇吾人は今や印度の宗教の教理即ち印度人民の信仰個條を探究すべき位地に達せり。されば其概
略を總括して、次に之を批評することとせん。

(一) 惟一神 アツヤン人種の祖先の中にて、歐羅巴に在りしものと亞細亞にありしものとは、大に
その境遇を異にし、從て其風習觀念に著しき差を與へたり。亞細亞にありしものは、神の力天然に表
現せるものと考へき。蓋之土地家屋家畜人間動物等風雨水火の恩恵に浴すること甚だ多く、太陽の光
線の如きは、殊に人心に勢力を有せり。さればこそ、印度人民ハ惟一神と他諸神とが、相競争奮闘して
這般天然現象を活現するものなりと信せるなれ。彼等は惟一神に形骸属性等を附與えて、之を具體的
に解釋し、近く可らざる神として禮拜せる、毫も怪むに足らざるなり。凡そ原始時代に於ては、宗教的
觀念を具體的に解釋せんとするは普通の現象にして、印度にても、苟も勢力ある天然力には、各之を